

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

二〇一三年、和食はユネスコ世界無形文化遺産に登録された。それより三十年以上も前から、生活習慣病対策の食事として注目され、欧州をはじめ全世界に広がった和食ブームは、和食が文化遺産となったことで、さらに加速した。ここで改めて念を押しておきたいことは、官民挙げての総力戦で文化遺産となったのは、「和食」そのものではなく、和食という「伝統的な食文化」であることだ。確かに和食は、多様で①シンセンな食材、持ち味を尊重する技、栄養バランスが良く季節感あふれるメニューが特徴なのだ。自然の恵みに感謝し、「頂きます」そして「ご馳走さま」と手を合わせる、日本人の精神性こそが文化遺産の本質なのだ。

農林水産省の発表によると、二〇一九年には海外の和食レストランは一五万件を超えたそうだ。だが、これで和食が世界を席卷しつつあると喜んでばかりはいられない。これらの和食レストランの多くは経営者も料理人も現地の人であり、畢竟、ブームに便乗した「②擬きもの」が提供される。これではまったく和食文化の理解にはつながらない。

もちろん、例外もある。国家最優秀職人章(MOF)の資格をもち、「フレンチの神様」とも称されたジョエル・ロブション氏は、日本、そして和食とその文化をこよなく愛した料理人だった。彼の発案と言われ、今や世界中に広まりつつあるオープンキッチン は、彼が割烹や寿司屋で学んだものだという。

一方、本家本元の日本国内でも、和食文化の将来は決してバラ色とは言えない状況だと観取する。もちろん私は、例えば「回転ずし」のように、寿司から派生して、もはや国民食と言ってもいいほどに根付いてきたものを誇るつもりはない。まるで開き直ったかのように、軽躁な話題を取り上げるマスコミや、エゴイステイックな商業主義に煽られて、「日本人」が和食文化の③を  
見失わないかと危惧するのだ。

例えば海外でも人気のある豆腐。大豆のタンパク質を④チウシユツして凝固させるこの食品も、元は大陸から伝来した。製法

は、水に浸して柔らかくした大豆をすりつぶした「呉」から「おから」を濾して（「生搾り」）豆乳を取り出し、加熱してにがりを加えて固めるといふものだ。しかし、その後、豆腐作りは日本の「軟水」と相性がよく、タンパク質のチュウシュツ割合も高い方法、すなわち呉を加熱してからおからを搾り取る「煮搾り」へと進化していった。また、凝固剤のにがりが、軍需品に不可欠なマグネシウムの原料として第二次世界大戦中には統制品となった。そこで石膏の粉（すまし粉Ⅱ硫酸カルシウム）が使われるようになり、職人さんの⑤ソウイ工夫と相まって、滑らかさが際立つ京豆腐（嵯峨豆腐）が誕生した。このように日本の豆腐は独自の進化を遂げ和食文化を支える食品となったのだ。

今でも生搾りを用いる「島豆腐」は、沖縄の水が凝固成分のカルシウムやマグネシウムを多く含む硬水であるために、煮搾りには適さない。一方で、京都の水は超軟水であるので、煮搾りが向いていたのだ。もちろん、製法が異なるこれらの豆腐にはそれぞれの味わいがあり、それを生かした料理もある。

しかし、⑥このような背景は等閑視して、煮搾りを⑦に「大量生産」と揶揄し、生搾り豆腐こそが「伝統的」で「手間暇かけた」ものだ<sup>うた</sup>と謳う業者や、それを大袈裟<sup>おおげさ</sup>に取り上げるマスコミも多い。さらに、すまし粉はまったく安全で玉肌の豆腐を生み出す優れた食品添加物であるにもかかわらず、「天然にがり」使用を必要以上に強調する輩<sup>やから</sup>もいる。

⑧、和食の特徴を述べる際に必ずと言ってよいほどに使われるのが、「豊かな自然が育んだ食文化」というフレーズ。確かに日本の風土は山紫水明とも表現されるように美しい。⑨、豊かな自然は、何も日本の専売特許ではない。⑩、和食の本質に迫るには、特色ある食材がどのような自然によって育まれたのかをきちんと理解する必要がある。それには、地球上で最も震源地や火山が密集する「変動帯」日本列島で、和食を育む自然が誕生した地質学的な背景を知ることが大切だ。そうすれば、世界の料理の中でも和食がオンリーワンであることを認識できるだろうし、きっと和食をもっと美味<sup>おい</sup>しくいただけるに違いない。私はこのようなアプローチを「美食地質学」と呼んでいる。一つ例をあげることにしよう。

縁起物としてハレの日には欠かせない鯛。日本の沿岸に広く生息する魚だが、ブルーのアイシヤドウに飴色の身をもつ「明石鯛」は別格である。まるで川のように流れる明石海峡の潮にもまれて育つ鯛は筋肉質で、エネルギー源であるATPが豊富だ。そしてこの物質が分解熟成してうまみ成分イノシン酸となるのだ。

瀬戸内海には、高速潮流の瀬戸（海峡）と、比較的海が広がり穏やかな灘が交互に配置している。瀬戸では潮流が鯛や蛸を育み、灘は泥質の海底に穴子や鱧が暮らす。このような特異な内海の地形を造ったのが、フィリピン海プレートの運動だ。このプレートは、もともとは北向きに沈み込んでいたのだが、現在の関東地方の地下深い所で巨大な太平洋プレートにぶつかってしまった、それで仕方なく約三〇〇万年前にやや西向きに、すなわち西日本に対して斜交する方向へと運動を変えたのだ。そのことで地盤の古傷でもある「中央構造線」が断層としてズレ出し、それに伴って断層の北側、すなわち瀬戸内海周辺には複数のシワが寄るように⑩隆起域（瀬戸）と沈降域（灘）が形成された。明石鯛などの瀬戸内海の豊かな幸は、⑪このようなダイナミックな変動がもたらしたのである。

ここで忘れてならないのは、隆起や沈降などの⑬チカク変動は、断層運動を伴う場合が多いことだ。つまり、瀬戸内海の地形が成立する過程では、数えきれないほどの地震が起きてきたに違いない。その一つが一九九五年の兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）である。この直下型地震は、淡路島から明石海峡を経て六甲山地へ続く隆起帯と、大阪湾という沈降域の境界をなす断層がずれ動いたものだ。

つまり私たちは、海の穀倉地帯と呼ばれるほどに豊かな瀬戸内海の恩恵に浴する一方で、直下型地震という試練も与えられているのだ。

このように和食文化は、「変動帯の民」が、⑭、言い換えると日本列島に抱かれるように暮らしながら育んできたものなのだ。だからこの変動帯特有の文化やその背景にある日本人の感性は、地質学的に「安定大陸」と呼ばれ、チカク変動や火

山活動による自然災害が比較的少ない地帯で、しかも自然を人間の支配対象とみなす地域の文化とは決定的に異なる。

自然とのしなやかな共生は、これからもこの日本列島に暮らして行こうとする変動帯の民の規矩きくとなるに違いない。そればかりか、同様に、いや日本列島以上に複雑かつスケールの大きな変動を繰り返す「水惑星地球」で、人類が注「人新世」を生き抜いていく<sup>⑮</sup>フリンシブル(原則)になるのかもしれない。

変動帯の民は、荒ぶる日本列島に暮らしながら和食文化を培つちかってきた。私たちも、和食をただける有り難さを噛かみしめながら、この日本列島からの恩恵を、子々孫々も享受できるにはどうすればよいかを強したかに考えたいものだ。これが私たちの世代の責任ではなかるうか。

『和食文化を育む世界一の変動帯、日本列島』 巽 好幸

注 「人新世」・・・「人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆い尽くした年代」という意味の新造語。

問一 傍線部①・④・⑤・⑪・⑬の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問二 傍線部②「擬きもの」とありますが、筆者の言う「擬きもの」とは、どのような意味ですか。解答欄に合うように五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

海外で提供される和食は、という意味。

問三 空欄③に入る適当な二字の語を、これより前の文中から抜き出しなさい。

問四 傍線部⑥「このような背景」とありますが、「京豆腐（嵯峨豆腐）」と、「島豆腐（沖縄の豆腐）」の製法の違いと、違いが生  
まれた理由を説明しなさい。

問五 空欄⑦に当てはまる言葉を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 十中八九 じゅうちゅうはつく    イ 十人十色 じゅうにんといろ    ウ 十把一絡げ じっばひとから    エ 十重二十重 とえはたえ    オ 十年一日 じゅうねんいちじつ

問六 空欄⑧・⑨・⑩に当てはまる言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば    イ しかし    ウ あるいは    エ ところで    オ すなわち

問七 傍線部⑫「このようなダイナミックな変動」とは、どのような「変動」ですか。百字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問八 空欄⑭に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 繰り返し試練を与える日本列島に畏敬の念をもちながらその恩恵に感謝する  
イ 繰り返し試練を与える日本列島を畏怖しつつも利用できる資源を求め続ける  
ウ 日本列島の与える試練を克服しようと様々に工夫を重ねて自然を屈服させる  
エ 日本列島の与える試練に苦しみながらも「安定大陸」と同様の文化を育てる  
オ 日本列島で生きる者として与えられる試練を無抵抗に受け入れ暮らしていく

問九 傍線部⑮「プリンスプル（原則）」になるのかもしれない」とありますが、筆者は、どのようなことがプリンスプルになると  
考えていますか。適当な語を文中から抜き出しなさい。

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

一年とちよつとぶりで、イタリアに行こうと決めた。約束の期日に間に合わせられるかどうか、気ばかりあせる仕事をいくつもかかえる毎日で、こんなことをしてはロクなことにならないと、まるで自分の時間に急ブレーキをかけるようにして、旅を思い立ったのだった。会いたい人たちにだけ会って、話したいことだけ話して、さっぱりして帰ってこよう。

出発の日が来て、私は、例によって旅立ちの不安(バスは定時に空港に着くだろうか、パスポートはちゃんと持っているだろうか、家の①トジまりはあれでよかったか、ローマの空港で友人が電話で話したとお待っていてくれるだろうか)に②くしやくしやになりながら、朝早いターミナルにいた。

空港までのリムジン・バスを待つ列に、たぶんうつとうしい顔をして並んでいた私のすぐまえで、少年がふたり、こちらは旅行に出ることがただうれいのだろう、仔犬こいぬみたいにはしゃいで、追いかけては捕まえてこをしていた。十一、二歳といったところだろうか、Tシャツに半ズボンという簡単な服装の、手足がすらりと伸びた動作のうつくしい少年たちで、そのことがまず私の注意をとらえたのだった。見るともなく見ていると、少年たちはどうやらふたごらしい。おなじ服装というのではないが、ふたりの動くリズムが、まるでこころよい音楽のようにぴったりと合っている。それに、どこかひよわそうなところがありながら、いや、そのひよわい感じのせいなのかもしれない、ふたりにはなにか見るものの目をひきつけるふしぎな魅力があった。いったいこれはどういふことだろう。旅立ちの不安も忘れて、③私はその少年たちに見とれた。そして、彼らが手話でふざけあっているのに気づいた。

少年たちの姉さんなのだろう、三、四歳年長と思われるすらりと背のたかい少女が、これも手話で、いつときもじつとしていない弟たちをたしなめている、その三人のなぜか初々ういいういしい自然さに、私はそのまま彼らの世界に吸いこまれていった。

そのうち、少年のひとりが相手をかわそうとして足で触れた小型のリュックが、私の足もとにころんと倒れてきた。リュックは、一目でそれとわかる当今はやりのイタリア・ブランドで、私には、万国旗をおもわせるあかるいその色彩が、このきょうだいたち

がいま始めようとしている旅へのときめきをきつちりと表現しているように思えて、④ちよつと足をひっこめただけだった。すると、私の足もとにころがったリュックを手でおこしながら、少女が、ちいさな声でいった。ごめんなさい、いたずらな子たちで。彼女は、⑤カミに手をやりながら、私にそうあやまると、弟たちには手話で、こんなことをして、とでもいつてるのだろう、ゆびさきに力をこめて話しかけている。リュックをころがしてしまった少年は、せつなそうに頬をあからめて、私から目をそらせた。

やがて時間どおりにバスが来て私たちは乗りこんだのだが、そのときはじめて、私は彼ら三人の母親らしい人がいるのに気づいた。バスのなかでは、まるで耳のきこえない少年たちをかばうように、姉娘がひとりの少年と、そしてきれいな横顔の姉娘によく似た細おもての、四十そこそこかと思われる女性がもうひとりの少年と、通路をはさんで、ふたりずつの席をとったからだ。彼らの席が私のすぐまえだったので、そのときはじめて、母親のよこにすわった少年が、すこしは聴力があるのだろうか、耳のうしろに小さな補聴器をつけているのがわかった。バスが高速道路を走りはじめてからも、四人の家族は、まるで目に見えない⑥機を織るように、素早く手先をうごかし、あかるい陽のひかりをとおすレースのようにゆびをからみあわせては、たのしげに会話を つづけていた。生まれてはじめて手話を見る気持ちで、⑦私は、みごとに四人の会話を(じぶんではなにひとつ解読できないまま)目で追った。

彼らの手の動きが、なみはずれてうつくしいことに気づいたのは、かなり時間がたつてからだったように思う。母親の手の動きはちいさくて、やさしく、娘の手はひらひらと蝶ちようのように舞う。少年たちのは、元気がよくて、大きく左右に振れる。どこの家庭にもあるように、きっと彼らだけに通用することばや感情も、いくつか、この手の動きで表現されているにちがいない。そして、私が彼らの話に見とれていたのが、彼らが手話で話していることのめずらしさから、というのではなくて、手からはじまり、からだぜんたいにそれをつたえるようにする、そのしぐさの、音楽的な、といつていい華やぎに、ちょうど声のきれいなひとの会話に耳をかたむけるように見入っていることに気づいたとき、私のまえにこれまで知らなかったあたらしい世界がひらけた思いだった。

手話、といういわば非常の手段を、こんなにも愉たのしげに、こんなにも人まえで気持よく使いこなせることもたちの背後には、しつかりとした日常の心づかい、たとえば⑧クツを脱いだらちゃんとそろえなさい、そんな大きな声でおかあさんを呼ばなくても、

ちゃんときいてますよ、といった人間ぜんたいとしての感性のようなものが、たぶんこの母親らしい女性によって少年たちに伝えられ、みがかれていったのではないかと思いたって、私は、彼女のうしろ姿をもういちど⑨ナガめた。

高熱がつづいたのだろうか、それとも先天性のものだったのか、いずれにせよ、ふたごで生まれた赤ん坊たちの聴力が、ほかの子のように機能しないとわかったとき、このひとはどんな暗い淵ふちをのぞいたことだったろう。それから立ちあがるのに、どれほどの時間がすぎたのだったか。こんなに肩をはらない、ふつうの姿勢で、しかも自分の人間としての豊かさをぜんぶこどもたちに伝えられるようになったのには、どんなきっかけがあったのだろうか。それとも、すべては小さな毎日の積みかさねにすぎないのだろうか。タイヤの音をひびかせて走るバスのなかで、母親らしい、ものしずかな女性のうしろ姿を見ながら、私はこれまで歩いてきた彼女の日々を思いやった。こうやって、耳のきこえないふたりの息子たちの面倒を、半分は姉娘に見させながら旅に出ることができるようになるまでの彼女の時間が、いまの彼女のしずかさややさしい指と手の動きが、私にはかぎりなく大切なものに見える。

バスが空港に着くと、⑩うつくしい家族は私の降りるのよりひとつまえのウィングで降りていった。少年のリュックがイタリアのデザインだったので、⑪うかつにもずっと旅がいつしよと思いきんでいた私はなにやらがっかりしたけれど、⑫自分の旅立ちまでが彼らに祝福された気分だった。

『ふたごの旅』須賀敦子

問一 傍線部①・⑤・⑥・⑧・⑨の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問二 傍線部②「くしゃくしゃになりながら」とありますが、「くしゃくしゃになる」とは筆者のどのような様子を表していますか。最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア うわの空で心ここにあらずの様子      イ 迷いが生じ心細くなっている様子

ウ 納得がいかず不満を感じている様子      エ いらいらして気分の晴れない様子

オ 物事が混乱して落ち着かない様子

問三 この文章の形式段落の一段落目と二段落目を読んで、筆者の性格として当てはまらないものを、次のア～キのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 行動力がある      イ 決断力がある      ウ 責任感が強い      エ 引つ込み思案      オ 心配性

カ 計画的      キ 真面目

問四 傍線部③「私はその少年たちに見とれた」とありますが、筆者はその少年たちのどのようなところに見とれたのですか。文中の言葉を使って百字以内で答えなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 傍線部④「ちよつと足をひっこめただけだった」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三人の初々しい自然な動きを見て、彼らの世界に吸いこまれ、心が引きつけられたから。

イ 姉である少女がすぐにあやまり、弟たちには指先に力をこめて手話でたしなめたから。

ウ リュックを転がしてしまった少年が悲しそうな表情をするので、大げさにしたくなかったから。

エ 旅行に出ることに胸を躍らせている少年たちの楽しげな様子に、水を差したくなかったから。

オ 十一、二歳の少年たちならふざけ合うのは当然のことで、目くじらを立てることもないから。

問六 傍線部⑦「私は、みごとな四人の会話を（じぶんではなにひとつ解読できないまま）目で追った。」とありますが、筆者が四人の会話から感じたことで当てはまらないものを、次のア～キのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 奇抜さ    イ 優雅さ    ウ 堅実さ    エ なめらかさ    オ 繊細さ    カ 敏捷さ    キ しなやかさ

問七 筆者は、彼らの手話に何を感じて、魅せられたのですか。それが書いてある最も適当な箇所を、文中から五十文字程度で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（句読点は字数に入れません。）

問八 傍線部⑩「うつくしい家族」は誰によって、どうやって築き上げられたと筆者は考えていますか。解答欄に合うように、文中の言葉を使って六十文字以内で答えなさい。（句読点は字数に入れません。）

結果、築き上げられた。

問九 傍線部⑪「うかつにも」の文中で使われている意味として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 是が非でも    イ うっかり    ウ 残念なことに    エ 思いがけず    オ 当然

問十 傍線部⑫「自分の旅立ちまでが彼らに祝福された気分だった。」とありますが、筆者がこのような気持ちになれたのはどのようなことがあったからですか。当てはまらないものを次のア～カのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年たちが旅行に出るのがただうれしくて、仔犬みたいにはしゃいでいる様子に不思議な魅力があり、旅立ちの不安も忘れるくらい引きつけられたから。

イ 母と姉娘が、耳の聞こえない少年たちをかばうように隣に座り、楽しげに手話で会話している様子は、初めて手話を見る気持ちで見つめてしまうほど見事だったから。

ウ 家族四人だけに通用することばや感情が手の動きによって表現されている様子が並外れて美しく、これまで知らなかった新しい世界が開けた思いがしたから。

エ 耳の聞こえない息子たちの面倒を、姉娘と共に見ながら旅に出ることができるようになった母親の喜びが、彼女の華やかに舞う美しい手の動きに表れていたから。

オ 母親が、少年たちのありのままを受け入れ、優しく寄り添いながら、人への心づかいやマナーなど、人間として大切なことを伝えていると感じたから。

カ 母親が、深い悲しみから覚悟を持って立ち上がり、ここまで乗り越えてきたことが、母親の自然体でもの静かなたたずまいから感じ取れたから。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記を一部変えています。)

あらゆる方面に聡明

今は昔、持統天皇と申す女帝の御代に、中納言大神おのみわの高市麿たけちまろといふ人有りけり。本よりひととなり心直こころみしくして、各おのおのに智さとりであった。  
いろいろなことを知り尽くしていた。そこで、

有りけり。又①文を学して、諸道に明らかなり。然れば、天皇この人を以て世の政を任せたまへり。これによりて、高市麿国を治め、民を哀れむ。

ある時、多くの役所に命令を出して、

準備を整えよ。」と命令を下された。

しかる間、天皇諸の司に勅して、獵に遊ぶむ為に、伊勢の国に注①行幸有らむとして、「速やかにその儲を営むべし」と下さる。しかるに、その時②三月のころなり。高市麿奏して曰く、「近來農業のころほひなり。かの国に行幸有らば、必ず民の煩ひ無き天皇に申し上げて言うことには、

にあらず。然れば、③行幸有るべからず」と。天皇高市麿の言に④従ひたまはずして、猶、「行幸有るべし」と下さる。然れども高市麿の猶重ねて奏して曰く、「猶この行幸⑤やめたまふべし。今農業の盛りなり。田夫の愁へ多かるべし」と。これによりて、遂に行幸やみぬ。然れば、民喜ぶ事限りなし。

人民

或る時には天下注②早魃かんばつせるに、この高市麿我が田の口を塞ぎて水入れずして、百姓の田に水を入れしむ。水を人に施せるに

よりにて、既に我が田焼けぬ。かやうに我が身を棄てて民を哀れむ心有り。これによりて、天神感を垂れ、竜神雨を降らす。但し、

誠意を尽くしたので、

高市麿の田のみに雨降りて、余りの人の田には降らず。これ偏ひとへに、実まことの心を至せれば、天これを感じて、守り加ふる故なり。

〔今昔物語集〕

注 1 行幸……天皇のお出かけ。みゆき。

注 2 旱魃……長い間雨が降らず農作物に必要な水がかれてしまうこと。ひでり。

問一 傍線部①「文」の読みを現代仮名遣いで書き、その意味として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和歌    イ 手紙    ウ 法律    エ 漢詩文

問二 傍線部②「三月」の異名を漢字で書きなさい。

問三 傍線部③「行幸有るべからず」とありますが、

(1) 「高市麿」はなぜ「持統天皇」の「行幸」を止めようとしたのかを二十五字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

(2) 結局、この時の「持統天皇」の「行幸」はどうなったのですか。十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 傍線部④「従ひたまはずして」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問五 傍線部⑤「やめたまふべし」を現代語訳しなさい。

問六 「高市麿」の「ひととなり」について、文中の「持統天皇の伊勢行幸」と「天下旱魃」の話に共通するのはどういうことですか。解答欄に合うように三十字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れません。）

高市麿は

問七 次のア～オのうちから、「持統天皇」の歌を一首選び、記号で答えなさい。

- ア 秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ
- イ 田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
- ウ 春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香久山
- エ あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む
- オ 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも